あけましておめでとうございます。みなさまには、新春を健やかにお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は、全国で大規模災害が多発し、改めて災害に対する備えの重要性を認識したところです。今後も、災害に強いまちづくりを進めるとともに、医療供給体制確立のための新中核病院整備、人口減少・定住促進対策など、山積する問題解決に向け全力で取り組んでまいります。

今年は、筑西市誕生10周年の節目を迎えます。これを契機に、本市の魅力を効果的に発信し、市民のみなさんとのなお一層の一体感の醸成と住んで良かったと思える「筑西市」の実現に向け歩みを進めてまいりますので、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

筑西市長　須藤茂

新春対談

昨年、市内でオールロケが行われた映画『十字架』の監督・五十嵐匠さんと、ロケでは目に見えない部分をサポートいただいた「ちっくタッグ」のリーダー・白井佐智子さん、赤荻教育長と須藤市長による、映画『十字架』の話題や映画を通して感じた筑西市の魅力などについての対談をご紹介します。

映画『十字架』制作への思い

市長：みなさま、本日は大切なお時間を頂戴いたしまして誠にありがとうございます。

これから、昨年市内でオールロケが行われました映画『十字架』の話題を中心に、映画制作に携わって思うことや期待すること、撮影を通して感じた筑西市の魅力などについて対談させていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

まずはじめに、映画『十字架』を制作された五十嵐監督、この映画にかける思いなどをお話しいただければと思います。

五十嵐監督（以下五十嵐）：この映画は、中学2年生の男子生徒が、いじめにより遺書を残して自殺してしまい、その遺書に書き込まれた同級生4人の、その後の20年の人生を描いた映画になっています。

原作は直木賞作家・重松清さんの渾身作で、本人は実際にいじめ自殺をした子どもの親にもインタビューして書いているとのことです。

僕は原作を読み感動し、この作品をなんとか映画にできないだろうかと思い続けていました。

また、これまで僕は、筑西市内でロケを行った『HAZAN』をはじめ、実在する人物ばかりの映画を作ってきましたが、今回はじめてのフィクションということで、ある意味自分の中で熟成するまでに時間がかかりました。しかし、撮影での筑西市のみなさまのあたたかいご協力のおかげで、ようやく完成に近づいているところです。

市長：白井さんには「ちっくタッグ」のリーダーとして市の活性化のためにご協力いただきました。本当にありがとうございます。

今回の『十字架』撮影のサポートを通して感じたことはどのようなものだったのでしょう。

白井リーダー（以下白井）：今回のロケは、行政側からのお話だったこともあって、すべての情報を持って臨むことができない中での活動に困惑した面もありました。

そのような中、オーディション現場を見て、「ロケ以外のことは、私たちがいますから安心して演技をしてください」と感じてもらえる精神的支柱になって、子どもたちと撮影現場の人たちのフォローをすることが「ちっくタッグ」の役目かなと思いながら撮影に臨んでいましたね。

教育長：私は、子どもは、元気よく、楽しく生き、成長できることが一番いいことだと思っているんですよ。

▲映画『十字架』出演者のみなさん

下館中学校の「君を守り隊」活動は、平成8年に活動を始めましたが、今回の映画を通して、君を守り隊の「いじめゼロ」を目指した取り組みを筑西から全国に発信できたらと強く思っています。

また、関城中学校を舞台に、生徒と保護者のみなさんが一緒に撮影に参加することができたことは、大変うれしかったですね。五十嵐監督には本当に感謝しています。

市長：私も撮影現場で、「いじめ・いじめられ・傍観」それぞれの立場を演技する撮影風景を見て、大変感動し、必死になって演技をする生徒や保護者のみなさんの姿を見て感銘を受けました。

またこの映画は、いじめゼロのメッセージ発信と同時に、市を全国にアピールできるチャンスと考えています。

今こそ、いじめ問題を筑西市から発信

五十嵐：実は、この映画に出演してくれた生徒の中に、実際に自分がいじめに遭い3回転校した経験を持つ生徒がいたんですよ。

須藤市長

いじめをテーマにした作品の中で、この生徒がいじめに対して真剣に向き合い、成長しながら演じている姿が印象的でしたね。

この映画を見ることで、いじめについて子どもたちや社会に、少しでも関心を持ってもらえれば本当にうれしいですね。

最近は、ネットいじめなどが問題となっていて、いじめ問題は今でも終息していないんですよ。

だから、今こそいじめ問題を発信すべきだと思います。

市長：そうですね。関城中学校でのクランクインで、撮る側・撮られる側一体で行われた撮影はインパクトがありましたね。

この作品で、本当にいじめに対して社会に関心を持ってもらいたいですね。

映画館以外にも全国展開をしたい

市長：さて監督、この映画の今後の展開をどうお考えでしょうか？

五十嵐：私は映画作りは縁だと思っているんですよ。

筑西ふるさと大使交流会での映画立ち上げの話や、「君を守り隊」活動を知ったことが縁で制作を決め、そしてその縁によってこの地で撮影を行うことができました。

今後は観てもらうための運動をしなくてはならないと考えています。映画制作は、立ち上げるまでも大変な労力を要しますが、制作後全国へ発信していくことにも、かなりの労力が必要となります。これからも、いろいろな縁でいじめ問題を取り上げたこの映画を全国展開できればと思います。

五十嵐監督

学校や行政のつながりなどで、例えば図書館などを利用して展開できないかとも思っています。

市長：筑西市もそうですが、今は映画館がないまちがたくさんあり、映画館だけで全国に発信するにはきびしいと思うんですよ。

映画館以外の方法を使って展開したいと思っているところです。なんとか行政でもルートを作って全国に発信していきたいと思います。

白井：以前『学舎（まなびや）』という、校内暴力をテーマにした映画があったのですが、この映画は映画館よりも全国の小さな施設での上映を続け時間をかけてヒットしたものです。『十字架』もそうなのかな？それをやるのがわたしたち「ちっくタッグ」なのかなとも思います。

五十嵐：全国の子どもが、図書館などでいつでも見られるようになって、いじめについて考えてくれればいいですよね。

他の県で、名称は違うものの、いじめに対して明確に目標を立てて取り組んでいるところも知っていますが、映画がきっかけで、筑西市の「君を守り隊」が全国にできたらいいなと思いますね。

教育長：もっともっと「いじめをしない・させない・許さない・そして君を守り隊」運動を広げていきたいと思います。ネーミングもいいですしね。

これからも、教育の現場から強くサポートしていきたいと思います。

700人のエキストラでの撮影
（平成26年7月21日・関城中学校）

市内オールロケを通して感じた筑西市の魅力

市長：私は、映画『十字架』を通して、いじめゼロを発信することともうひとつ、筑西市の魅力を全国に発信していくことも重要と考えています。

どうしても、地元に長い間暮らしていると、住んでいるまちの魅力が見えなくなってしまうと思うんです。

そこで、今回ロケを行って感じた筑西の魅力をお話いただければと思います。

普通にある食べ物や景色が財産

五十嵐：僕は、「人と土地」だと思います。

このまちに住む人たちや土地柄は、遠い昔からある日本人の品格や品性、あたたかさを持っているように感じるんです。

なぜかほっとする雰囲気は、都会にはない大きな魅力だと思います。

顕著に出ているのは、子どもたちの笑顔です。

表情が生き生きしていて素直なんです。土地や場所が子どもたちを育てるんだなと改めて思いましたね。

板谷波山先生が晩年、鳩杖をふるさとの人たちに送り続けたという話を聞くたび、子どもの優しさを育む土地柄なんだと思います。

また、このまちから見える夕陽はとてもきれいだし、四季折々の姿を見せる紫峰筑波山も僕が大好きな風景なんです。

食べ物にしても、「これが名産」というより、「特別なことでなく普通にあるものが名産」であることが財産だと思います。

住むだけで癒される、落ち着いていられる、懐かしく食べ物もおいしい、子どもも輝いていることなどすべてが魅力だと思います。

人柄の良さ、一体感がこのまちの持ち味

白井：今回のロケのクランクインでは、いきなりクライマックスシーンとなり、700人ものエキストラを集めた撮影となりましたが、あのときの地域一体感が心に残っています。

関城中学校に集まった地元の人、地区外の人たちがクライマックスシーンの撮影に臨む姿は印象的でしたね。

また、私たち「ちっくタッグ」のメンバーも、オーディション・レッスン・撮影と進んでいくうちに、子どもたちが日々成長していく姿を感じ取っていました。

関城中学校在校生のみなさんや保護者、PTA、学校関係者など、想像を越えた協力体制で撮影に臨んだ中に見えた、一体感と人柄の良さこそ、監督がおっしゃるようにこのまちの魅力なのかもと感じています。

白井リーダー

市長：そうですか。地元に住んでいてはわからないものがたくさんありますね。

監督の言われた「やさしい人と住みやすい土地柄、あたり前にある名産」など、すべてが筑西の魅力であり、白井さんが言われた地域一体感もやはりこのまちの魅力なんだと気づかされました。

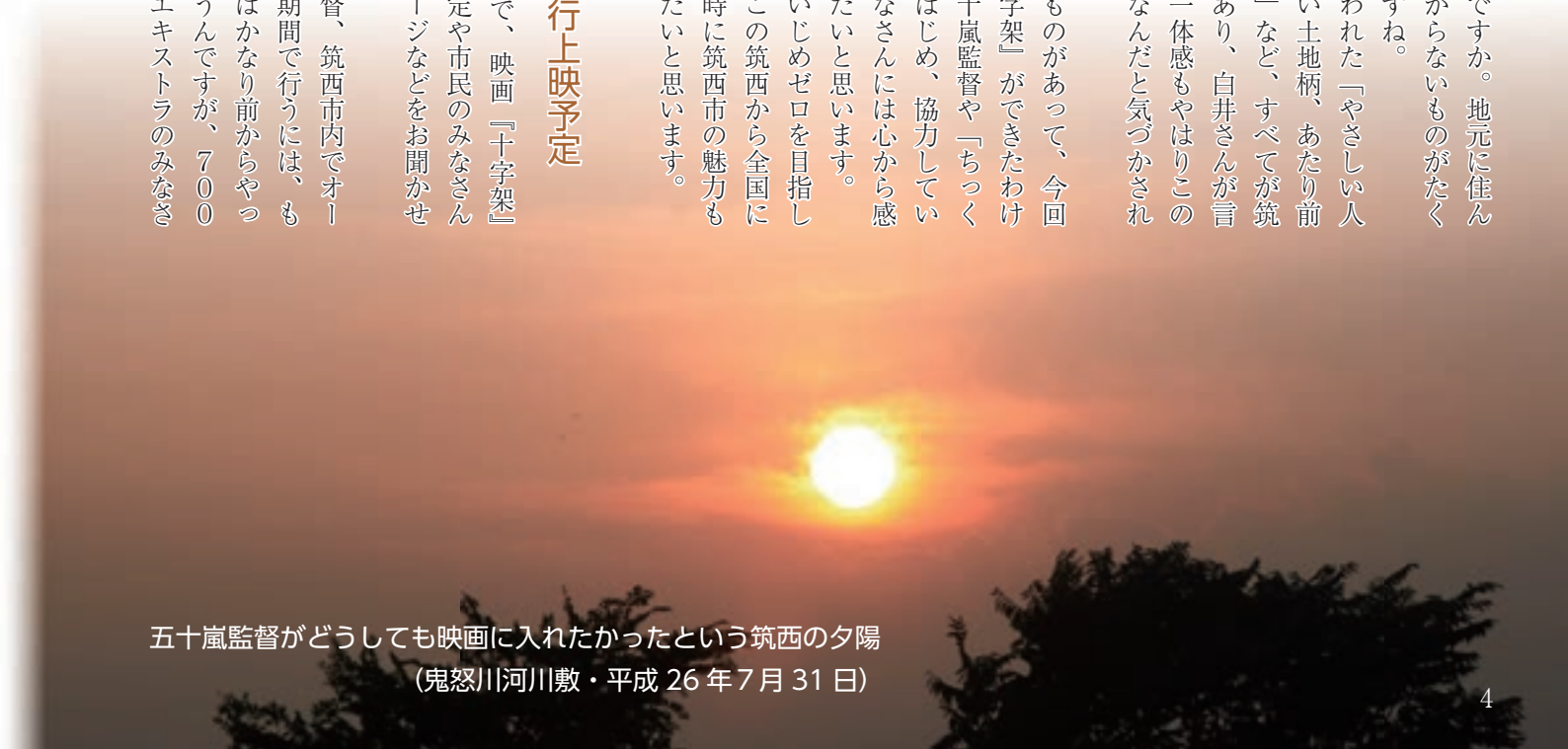
縁というものがあって、今回の映画『十字架』ができたわけですが、五十嵐監督や「ちっくタッグ」をはじめ、協力していただいたみなさんには心から感謝申し上げたいと思います。

今後は、いじめゼロを目指した活動を、この筑西から全国に発信し、同時に筑西市の魅力も広めていきたいと思います。

夏休みに市内で先行上映予定

市長：ここで、映画『十字架』の今後の予定や市民のみなさんへのメッセージなどをお聞かせください。

まずは監督、筑西市内でオールロケを短期間で行うには、もちろん準備はかなり前からやっていたと思うんですが、700人を越えるエキストラのみなさ


五十嵐監督がどうしても映画に入れたかったという筑西の夕陽
（鬼怒川河川敷・平成26年7月31日）

んの協力も大きかったと思います。みなさんへのメッセージをお願いします。

五十嵐：この映画は、たくさんの人たちのご協力があって成り立ったものです。地元のみなさま本当にありがとうございました。

この映画のテーマはいじめですが、いじめは無くなることのない、根が深く非常に難しい問題です。

「いじめる側・いじめられる側・傍観する側」の目を通して描いた見所たくさんの作品となっています。

地元のみなさまの全面的なご協力で作り上げた『十字架』、今年の夏休み中（8月予定）に市内で先行上映の予定ですので、出演してくれた子どもたちの姿などをぜひご覧いただきたいと思います。

そして、いじめゼロ運動をこの地から一緒に発信していきたいと思います。

白井：映画の舞台となったこのまちに、映画によって物語がつけられ、感情がこもり、ひとつひとつの場所や景色に意味を持ち、いつも見慣れた風景に表情がつくと思っています。

スクリーンに映し出される筑西市がどのように描かれるのか、『十字架』の完成をとても待ち遠しく思っています。

私たち「ちっくタッグ」は、今後もたくさんの作品に出会い、筑西を訪れたこと、この場所で撮影したことを後悔させないサポートをしていきたいと思います。そして、筑西市が全国に知れ渡るように応援したいと思います。

教育長：下館中学校の「君を守り隊」活動がきっかけで映画が制作されたわけですが、いじめゼロへ向けての発信と、撮影に協力していただいた関城中学校の生徒や保護者、地元のみなさんが一体となった映画の公開を、大変楽しみにしています。

公開時には、ぜひ足を運んでいただきたいと思います。

市長：縁というものがあって、この映画ができましたが、「ちっくタッグ」をはじめ、ご協力いただいたみなさんに心から感謝いたします。

市としましても、この映画を通して、「いじめゼロ」を全国へ発信すると同時に、市の知名度アップ、魅力度アップを強力に進めていきたいと思います。

映画制作に関わったみなさまの今後のご発展と、このまちが魅力あるまちに向かっていく努力を惜しまないことを誓いまして対談を終了させていただきたいと思います。

本日は、ありがとうございました。

五十嵐匠（いがらししょう）さん　プロフィール

1958年　青森県生まれ
　　ドキュメンタリー映画監督・四宮鉄男監督に師事
1989年　津軽（TSUGARU）
1999年　地雷を踏んだらサヨウナラ
2001年　みすゞ
2003年　HAZAN（市内ロケ）
2010年　半次郎

筑西ふるさと大使として市の知名度アップにも貢献

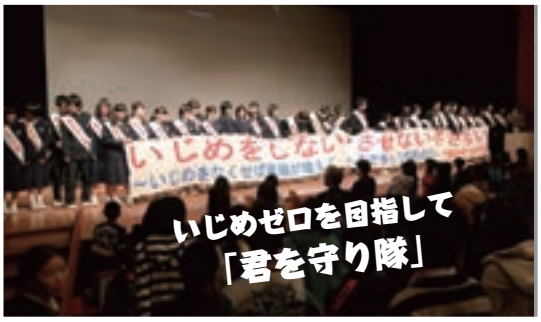
白井佐智子（しらいさちこ）さん　プロフィール

筑西市活性化プロジェクト「ちっくタッグ」リーダー。

ちっくタッグは、平成22年度に総務省のモデル事業として、市の活性化プロジェクトとして発足。

メンバーは、市内に住む青年会議所OBや下館商工会議所青年部、市職員など22人で、活動内容は市活性化対策として、主に映画ロケ誘致や特産品開発など。

筑西市オールロケ「またいつか夏に。」のサポートをはじめ、テレビドラマなどの誘致を精力的に行っている。



筑西市オールロケ　十字架　平成27年夏 先行上映予定

原作：直木賞作家・重松清

キャスト：永瀬正敏・小出恵介・富田靖子・木村文乃ほか